魔法先生ネギま！転生者なイレギュラー

るるぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！転生者なイレギュラー

【Ｎコード】
Ｎ７５７５Ｙ

【作者名】
るるぶ

【あらすじ】
暇をもて余した神々の遊び……　　正にその通りなことが原因で適当に選別された7人の者たちによる魔法が織り成す物語……とか言っておけば大丈夫でしょうかね？

第０話人生の終わりで人生の始まり？（前書き）

妄想が迸った結果です

第0話人生の終わりで人生の始まり？

どうも、おはこんばちわ。

俺の名前は上杉元希（ウエスギ ゲンキ）って言うんだ。
んでな、早速でなんだが……俺死にました。死因は交通事故だ。

ん？『どうせテンプレ通りに誰か助けて代わりに死んだんだろ』、
だって？
違うなぁ……ただ俺の不注意で、っていうか急いでて信号無視した結果轢かれて死んだんだよ！
どうだ！参ったか！！

……うん、まぁ自業自得だよね。
あの運転手のおっちゃん、賠償金とか慰謝料とか払わされんのかなぁ…、ごめんなぁ、タクシーのおっちゃん。

で、そんなわけでして、今現在死語の、改め死後の世界には死者が溢れかえっております。
なんで溢れかえってるのかというと、
神様方が楽しい事を思い付いた
←
現在仕事を放棄
←
考えを煮詰めてる

←
でも死者は来てる
←
待ち合い場所がいっぱいになる←イマココ
ってことらしいぜ！
いやぁ、親切な天使さんのお陰で状況がスゲー分かりやすかったぜ！

でもね、一番驚いたのはさ、天使さんと悪魔さんが普通に一緒に仕事をしてんのな。
いやはや、天使と悪魔が仲良くしてんだから人間も人間同士しっかりと仲良くすればいいのにねぇ…。

「あ、上杉さん」

「ほえ？ありゃさっきの天使さん」

と、そんな死後なのに人間の今後を憂いていると綺麗な翼を生やしたお姉さんが呼び掛けてくれました。
この人がさっき言ってた天使さん。
苦労人オーラがバリバリですよ、バリバリ。

「なにか失礼なこと考えませんでした？」

「いーえー、なぁんも考えてませんよ？」

「……怪しいですけど、今はいいです。神様曰く貴方は抽選に当選された7人目です。至急神の間へ、だそうです。」

「抽選ってなんですかっ？！」

え、なに？死後の世界にもなんかあんのっ？！
てか生きてたうちに抽選当たったことないのに何故今当たりますかっ！？

「私にもわかりませんよっ！というより神様方が何考えてるのかなんてわかったらこんな苦労なんてしませんっ！！うぅ、もぉやだぁ…」

……ヤバい、涙な天使さん、メチャ可愛いっ！

ごほん…

「えーと、天使さん、神の間とはどちらなんでしょうか？」

「うぅ、そこの扉開ければ勝手に行けるので、どーぞ…」

うっわー、テンション低っ！
触らぬ天使に祟りなしだ、うん。

「で、ではさようならー」

天使さんの気がなるべく障らないように扉を開け俺は飛び込みました。
だってしょうがねぇじゃんっ！天使さんの鬱オーラで皆逃げるようにしてなんか広めの空間まで出来てたんですよっ！
ハードル高過ぎるわっ！
と、とにかく神の間へレッツゴー！

で、着きました神の間に。

「……なんで君は息切れしているのかな？」

「き、気に、しな、いで、くださ、い……」

ただ全力で逃げてきただけなので。

と、俺に怪訝な視線を向けているクールそうなお姉さん？は神様なんだろう。

「まぁ、いいがね。ではよく聴きなさい。」

「君はとある異世界に転生することが決定しましたー、やったね（棒読み）」

「……あの、スゲー棒読みですね」

「まぁね、今回のコレに私は全く関与していないからね。まったくご年配の方々は娯楽の為によくもまぁ…。」

「娯楽？」

「あぁ、娯楽だよ。こっちでは殆ど娯楽がなくてね。あるのは下界のマンガやドラマといった物くらいでね。暇をもて余した方々はしまいには似たような異世界を見つけソコに能力を与えて転生させて、原作とどう違うのか楽しむんだよ。」

「そのお陰で時の神達は大変なのさ。もともと分岐していく世界を管理しなければいけないのに更に増えてしまうからね。」

「……大変なんですね」

「そうだね。さて、そろそろ本題に入ろうか？」

「あ、はい」

神様の愚痴（？）も終わったようなのでキッチリと聴く体勢に入る。

「君は幸運にも異世界への転生に当選した。勿論前世の記憶を保持したままにね。そして今回選ばれたのは君を含めて7人で全員日本人だ。」

「あのー、質問です。」

「なんだい？」

「なんで7人で全員日本人なんですか？」

「あぁ、人数は適当だそうだ。そして日本人だけなのは君達が行く世界が日本のマンガだからだそうだよ。基本的に創作のある国の人間から選ばれるんだ。」

「そうなんですか。」

「さて、他に質問はないかな？ないなら続けるよ？」

「あ、ないです」

「そうかい、なら次は……あぁ、行き先は『魔法先生ネギま！』らしいんだけど、知っているかい？」

えーと確か魔法ありのラブコメだったっけ？

「えーと、概要位なら知ってます。」

「なら問題ないね。」

うんうん頷いている神様。

「なら次は能力付与の時間だよ。なにかあるかな？」

能力、能力かぁ……。

「すみません、能力って何でもいいんですか？」

「あぁ、もちろんさ。他の創作物からでも構わないそうだよ？あくまで私は君の要望を聴いてそれを専門の部署に送るだけだからね。」

驚愕の事実！死後の世界でも部署とかがあるようです。

「えーとならですね、『とある魔術の禁書目録』及び『とある科学の超電磁砲』に登場する御坂美琴の能力とメダル生成機能を持つ何かを頂けませんか？」

俺が選んだのは発電能力だ。ビリビリ中学生の使用法以外にも奪還

屋のタレる不思議生物が使ってたみたいにプラズマや鉄製のウィップを用いれば更に戦闘の幅が広がるしな。
あとメダル生成はお財布に優しいし。

「あー、これだね。うん、両方可能だよ。もう他に決めておくことはないかい？」

「んー、無いですね。その2つがあれば大抵はどうにかなりそうですし。」

「ふむ、了解だよ。では次に君が目を覚ます時は転生後の赤ん坊だよ。それじゃあ二度目の人生に幸多からんことよ。」

そうして俺は意識を失っていった……。

「あ、しまった。転生後の性別を訪ね忘れていたな……あの子が選んだ能力の元の持ち主を参考にするように送っておこう、うん、そうしよう。」

「―オギャァァア、オギャァァア（オレ！転生っ！）」

いやはや、まさか産まれた瞬間からだとは思わなかったなぁ……

あ、看護婦さん、もっとしっかり首んとこ抱いて。据わってないから、首まだ据わってないからね？

「お母さん、元気な『女の子』ですよ！」

はい？女の子……？

赤ん坊体動かし確認中……

「―オギャァァァァァァァァッ（プラプラしたのが無いよぉぉぉぉっ）！！！？」

絶望した！まさかのＴＳに絶望したっ！！

「……元気な娘、いい？貴女の名前は夏輝（ナツキ）よ」

「―オギャァァァっ（女の子の名前だぁっ）！」

「あらあら喜んでますよ？」

「ホントね」

「―おぎゃ、オギャァア（喜んでないからね）！」

そうして、そんなこんなで俺、上杉元希改め……

私、鳴海（ナルミ）　夏輝（ナツキ）の二度目の人生が幕を開けたのだった……。

第1話今日、私は……

夏輝　ＳＩＤＥ

私がこの世界に転生して早１２年。
え？この１２年間はどうだったのかって？
お願い、訊かないで……。
あのね、赤ん坊の頃から意識があるのって辛いの……。
わかる？お母さんにさ、お乳貰ったり、オムツ替えられたりしてるのをさ、しっかりとわかるのってさ、羞恥心がすごいのよっ！
しかもさ！私なんでか男→女になってたのよっ！！
流石に幼い自分の体に欲情なんてしなかったけど大衆浴場なんかじゃ女湯に入るしかないから、周りにいるのは女の人ばっかなのよ？
これが男のままだったら、素直に喜べたんだけど、体は女なわけなのよ。
アウト過ぎるじゃないっ！
その上見た目は某常盤台の超電磁砲（レールガン）そっくりに育っちゃったからヘタ事すると新井里美ｖｏｉｃｅなのに『お姉さまぁ～♪』とか言って絡まれそうで怖いのよっ！
あんなのに絡まれるなんて、身の毛もよだつわっ！？

……ゴメン、取り乱したわ……。
まぁ、そんなわけで１２年も女として生きてれば、流石に自分は女だー、っていう自覚は生まれてくるわ。

そのお陰かどうか知らないけれど、心の内でも女性的な感じになってはきたしね。
ただ、まだ男との恋愛はムリだわ。
だって、前の人生略して前生よりも今生はまだ短いんだから。
女の自覚があるだけでも十分よ。
あ、だからって百合って訳じゃないからね！

さてと、次は何を話そうかしら……？

ああ、そうそう、私の能力についても改めて確認した事を話そうかな。

メダル生成については幼稚園に入ってすぐの頃かしらね。
枕元に腕時計みたいなのがあったのよね？
どうやらそれがメダル生成機能を持っていたみたいで身に付けていたら任意で、っていっても私から半径３０ｃｍ以内なんだけど、メダルを作り出してくれるのよ。
子供な私にとってはお財布に優しいし態々大量のメダルをゲーセンで交換しなくてもいいから、目撃する人はいないし、重い思いしなくてもいいからスッゴい便利なのよ、コレ？

で、問題があったのは発電能力（エレクトロマスター）の方なのよ。
元となったのが今の私の元の容姿な方だったからなのか、操れる力が微弱だったのよ。まさかのＬＥＶＥＬ．１からのスタートだったわけよ。
まぁ、初めから高威力から始まっても慣れてないから困るわけだか

ら、そこまで問題視する程ではなかったわ。
むしろ問題はその後だったのよ。
能力の向上するためには、薬か演算能力を鍛えるくらいしかないわけでしょ？
この世界に、まぁ、確実に無いとは言い切れないけれど、『あの』学園都市にあるような向上薬があるとは思えないのよね。あったとしても子供な私じゃ手に入るわけないしねー。
そんなわけだから演算能力を鍛える方を選んだわけよ。
けどね、コレがある種の間違いだったのよ。
元々は成人だったし、理数は得意だったし、転生したわけだからゴールデンエイジだから、理解はなんとか出来るし、詰め込んでもいけるのよ。
でもね、少し失敗しちゃったのよ。
皆もよく考えてみなさい？
年端もいかない女の子が難しそうな演算理論書や論文やらを毎日図書館で読み漁り自分なりにノートに纏めて理解していってる様を想像してみなさい。
異常でしょう？でもね、周りは異常ととらなかったのよ。
『天才少女』ってとらえたのよ。
そのお陰で鬱陶(うっとう)しいことに持て囃されたのよ。まぁ、その代わりに図書館の更に貴重な蔵書とか見せてもらえたのはラッキーだったし、小学６年生の秋にはＬＥＶＥＬ．５にはなれたんだけどねー。
で、なんか持て囃されてた私はある時誘拐されそうになったのよ。
（まぁ、能力使ったお陰で事なきを得たけど。）
けどまぁ、共働きな私の親は、この事態を結構重く受け止めたみたいでねぇ。
私の事は大切だから一緒に居て護ってやりたかったみたいだけど仕事も軌道に乗って来ていたからそれも出来ずに、最終的に私は中学から治安のいい全寮制のとある学園都市に入学する羽目になったのよ。

で、其処の名前は『麻帆良学園都市』。
技術力は高いけど、『あの』学園都市のようなぶっ飛んだところじゃないから、あそこ並みの暗部は存在しないはずよね。
……絶対にイヤよ、妹達（シスターズ）を造り（産み）出されるなんて……。

さて、長々と今までの敬意を述べてたけどそろそろ今現在の私の現状を語った方がいいわよね。
さっき私は『中学から』って言ったわよね？
実は先日私は卒業式を済ませたのよ。
で、今日から入寮ということでクローゼットやらは備え付けられてるそうだから、段ボールに本（理論書や論文、小説、マンガ）や服や下着なんかを詰めて寮に送るようになっていたから、私は散策ついでに１人電車を乗り継ぎ目的の寮へ向かっていたんだけど……。

「君、かわうぃねぇ♪」

「なになに？君、ここ初めて？」

「俺らがいろんなとこ、案内してあげるよ～」

「まぁ、最後にゃ、お礼をしてもらうけどなぁ♪」

「「「「ギャハハハハッ！」」」」

タチの悪いナンパどもに絡まれちゃったのよねー……。
ここ、治安いいんじゃなかったのかしら？
まったく、なんで私がこんな変なイベントにエンカウントしなくちゃいけないのかしらね？
あ、そういえば御坂も同じようなのにあってたっけ……。
容姿そっくりでもこんなのまで一緒にしないでほしいわね。

にしても……誰も助けてくれないわね。
まぁ通ってるのも気の弱そうなのばっかだし、巻き込まれたくはないわよね～。
それにコイツら雑魚そうだし、筋肉に電流流して強化すればちょっと身体能力の高い少女ってことで大きな噂にもならないでしょ？
と、ゆーわけでぇ……

と、私がそう考えた矢先に

「あー、いたいた。いやぁ、探したんだぞ？お前がなかなか来ないからさぁ…」

いきなり私の手を掴んで親しげに連れていこうとする男が現れた。
とゆーよりも、よ

「あんた、ダレ？」

【ピシッ！】

あ、凍った。

「なんでそんなことを言ってしまわれるんですか、お嬢様～っ！！？」

「だって、ホントに誰か解らないし。あとお嬢様言うな」

そんなアンタにはジトーッとした視線を送ってあげよう。

「だからって合わせるくらいしろよっ！知り合い作戦失敗しちまったじゃねぇかっ！！」

「助けとか要らないし、あと私、空気読めないから。」

「んなカミングアウトは心底いらねぇっ！」

「って、おいっ！俺達のことを無視すんなっ！」

あ、そーいえば居たわね、ナンパ軍団。
すっかり忘れてたわ。

「お前カンケーねぇんだろ！だったら消えろよっ！！」

「そうそう、それともなんか文句でもあんのぉ～？」
ほら、ナンパ軍団もこう言ってることだし速く帰りなさいよ。

「……なら言ってやるよ。お前ら恥ずかしくないのかよっ！女の子1人相手に何人も集まってよっ！」

へぇ、結構ちゃんと言うんじゃない。

「それになんで相手にこんな娘選んでんだよっ！この娘見た限りじゃまだ小学生かそこらだぞっ！こんなちっさい娘相手にするとか全員揃ってロリコンかよっ！！」

「おいコラ、ちょっと待ちなさい」

ダレが小学生よっ！確かについ先日まで小学生だったけど今はもう中学生よっ！！

〈一口メモ：正式に中学生と見なされるのは新年度から。つまり４月からになる。なおこれは他の学校でも基本的に同じ。ちなみだがこの日はまだ3月中。よって夏輝はまだ小学生である。〉

「「「「ロリコンで悪いかよっ！！」」」」

「アンタらもかっ！」

なんなのよっ！なんで更に違う色合いの犯罪にも巻き込まれそうになってるのよ！私はっ！！

「こんな風に成熟し過ぎる前の娘が大好きですっ！」

「本気（マジ）でロリコンなのかよっ！こんなちっさい娘相手とかねぇだろ！こんなちっさい娘とかっ！！」

【ピキッ】

あー、ヤバいわ、男と恋愛する気はまだまだ無いけど、異性にここまで身体的特徴なじられるのがこんなにムカつくとは思わなかったわ……。

「ツルペタ！ツルペタ！」

【ビキッ！】

そこのチャラ男……アンタはトリガーを引いたわよ……？

「誰がツルペタ幼女だごらぁぁぁあああっっっっっっ！！！！！」

【バチバチッ！ズガァァァアンッ！！】

我慢しててやろうと思ったけどもうっムリッ！
まったく……

「って……や、やっちゃった……？」

ヤッバ！怒りのままに放電とか……ど、どうしよ？
ま、まぁ死んでないわよね？なんかピクピク動いてるし、うめき声聞こえてくるし。

「つあー……、な、なんで電撃が？」

って、なんで一番近かったお節介野郎が無事なのよっ！
右手突き出してるけど、右手なんかで防げるわけ……って、右手？
まさかコイツっ！

「って、よく見たらビリビリじゃねーかよっ！！」

【ゾワッ！！】

っ！？決まりだっ！私の容姿を見てそんな感想が出てくるって訳は……っ。

「アンタまさか他のてｎ「コラー！お前らーっ！！」せ、って、え？」

な、なんか教師っぽい厳格そうなメガネのおじさんが走ってきてるっ？！

「げぇっ！？鬼の新田ぁっ！おい、ビリビリっ！逃げるぞっ！」

【ガシッ！】

「へ？ちょ、ちょっとっ！アンタなに私を担いでんのよっ！！」

「文句は後で聞くから今は逃げるぞっ！」

【ドタタタタタ……】

「コラー！！待たんかーっ！！」

「だぁぁあっ！なんかすっげー不幸だぁぁぁぁあっ！！！」

「ソレはコッチのセリフよぉぉおおっ！！」

なにっ！？私はこんなことされる覚えはないのにぃぃぃっ！

「あれ？おーい神条ー！グレープ食ってくかー？」

「サユーさんっ？！ゴメンッ！今取り込み中なんだぁぁぁあっ！！」

「いいから降ろせぇぇぇえっ！」

【ズギュンッ！】

「って、おーい……。仕方ない、追っかけるか。」

【シュンッ！】

【大きな樹の下の森】

「ぜぇ、はぁ……こ、ここまで来れば大丈夫だろ？」

「大丈夫だろ？、じゃないわよっ！いきなりこんなとこまでっ！アンタ一体なんなのよっ！」

「あー、わりぃ、ムリヤリ過ぎたよな…。」

「まぁ、穏やかじゃあ、無いわな。」

【ガサガサ……スタッ】

「うひゃあっ！？」

「うおっ！？ってサユーさんかよ……。」

「おお、そうだぜ。」

「だ、ダレよアンタは……」

「ああ、オレは長瀬佐右。で」

「あー、さっきはホントに悪かった。俺は神条斗真。」

「ナガセ…サスケに、カミジョウトウマ……ねぇアンタ達は一体なんなの……。」

「俺達は多分お前の同類だよ。」

引っ越し初日、私はこの世に生を受けて１２年たったその日、同郷の奴等と遭遇したのだった……。

第１話　今日、私は、同じ存在と邂逅した

第2話　今日から……

夏輝ｓｉｄｅ

「ハァ～……」

「……あの～、おぜうさま？何故私めの顔を見ただけで溜息を吐かれるのでせうか？」

「言ってほしいわけ？」

【バチィッ！！】

「ハイ！何でもございませんです！ハイ！！」

「よろしい」

ったく、なんでこんなことになっちゃったのよ！！！

【回想】

「俺達は多分お前と同じ存在だよ」

「やっぱり、同類か……」

「ま、転生させてもらった人間だな、オレら二人は」

「それよりもな？なんでやっぱりなんだよ、ビリビリ？」

「ビリビリ言うな！そんなの簡単よ」

そう、簡単なことなのよ

「そっちのナガセさんは分かんないけど、アンタ、見た目も力も『あの』フラグメイカー体質の不幸少年と一緒なのよ？少しでもサブカルに詳しかったら引っかかるわよ」

「ですよねー」

まぁ、かなり薄れてきてる前世の記憶でもとあるは某〇ーソンでキャンペーンもしてたから知名度自体はあるし

「まぁ、それに加えて決定的なのもあったし」

「ん？なんだ？さっきまで上げてた以外にもあるのか？」

あれ、まさかナガセさんが喰いついてくるとは思わなかったわね

「簡単よ、ソイツの能力はその見た目通りかは知らないけど、私の能力も見た目もソイツの元になった話のヒロインなのよ」

まぁ、十中八九アレだろうけど

「うん、それで？」

「で、その主人公がそのヒロインをこう呼ぶの……『ビリビリ』ってね。初対面でこんなこと言うなんてあり得る？私とソイツは初対面なのによ？」

これが無かったら異世界同位体かな？とも思ったんだけどね～

「つまり、コイツの見た目と不用意発言で確信した、って訳だな」

「そういうことよ。私やソイツは見た目がそれだからその辺気をつけなきゃいけないのに……」

「不用意すぎたなぁ、神条？」

「だぁぁぁぁぁあ！ちくしょう！不幸だぁぁぁあ！！」

口癖まで一緒なのね。

「でも気をつけてたってのはどうしてだ？」

なんていうかナガセさんは冷静ね、あっちで蹲ってるヘタレとは大違いね

「あ～、その私、初めの方は能力が弱くてさ。こんな見た目だから良からぬ考えを持ってる転生者に見つかったら嫌だったし。でもアンタ達は大丈夫そうだしね」

少なくともそこのヘタレは無害でしょ？あんな風な助け方だったけど、助けに来たわけだし。とりあえず某上条さんと一緒と考えてれば大丈夫そうだし。
こっちのナガセさんも…まぁ、悪い人ではないわよね？

「なるほどな。とりあえずオレは手はださねぇよ。見た感じ妹と年頃が一緒みたいだしな」

あ、妹がいるのか、なら変態でない限りは大丈夫よね。

「さて、じゃ、そろそろ……そこのヘタレ！！いい加減に現実世界に帰ってきなさい！！」

かるーくカミジョーに電撃を当ててみると夏輝は行動します、ってね

【バチ】

「いて！いきなり何しやがりますかこのビリビリは！！」

「アンタがいつまでもうじうじしてたからでしょうーが。あとビリビリ言うな」

全く、いい加減にしなさいっての

「私には鳴海夏輝っていう名前があるのよ、鳴る海の夏の輝きって名前がね」

「えーと、鳴海夏輝か……御坂じゃねぇんだな」

「いい名前だな」

ナガセさん、ありがと。あとカミジョー、アンタは後ではっ叩くからね

「で、あとは能力なんかも教えとこうかしらね？」

「いいのか？」

「いいわよ」

どうせ見た目通りだし

「私の能力は超電磁砲（レールガン）、電撃使いよ」

「あ～、やっぱりかぁ」

「おい、神条、やっぱりってなんだ？」

「いや、さっきですね、コイツ能力でナンパ連中をぶっ飛ばしてたんですよ」

ふ、若気の至りね……

「あ～停電騒ぎはそれが原因か」

「……ごめんなさい」

ど、どうしよう、ば、バレテないわよね？

「さて、鳴海が教えてくれたわけだからオレも教えるとするか。オレの能力は、カクレンジャーだ」

「はい？」

「だから、カクレンジャー。特撮の、戦隊モノのアレの１つだ」

……はぁ！？

「よくそれが通ったわね」

「オレ自身が驚きだよ。で、今生では甲賀忍者でもあるんだよ」

「？？？」

「えーとだな、実家が忍びの里でな？その関係でなんだよ」

「さ、さすがファンタジー世界……」

まさかホンモノの忍者がいるなんて……ってあれ？

「じゃ、妹さんもですか？」

「あぁ、オレより才能豊かな奴だよ」

……言葉の調子からコンプレックスは感じて無いみたいね

「ほれ、神条。お前も言ってやったらどうだ？能力」

「へ？あ、ああ。俺の能力は幻想殺し（イマジンブレイカー）、でしょ？」……正解だよ。1つめは、な」

やっぱり、見た目通りなわけですか。ま、右手でキャンセルしてたしね

「って、1つめ？」

「そ、1つめ。2つ目は『身体能力無上限』。これなら幻想殺しに引っかからないからな」

…確かに、自分にかかる異能の加護さえ消し去るわけだしね

「さて、そろそろ帰った方がいいんじゃないか？暗くなってきたし」

はい？ってナガセさんの言う通りじゃない！

「あ～、じゃとりあえず解散して何か分からないことがあったら聴きにきな、鳴海。オレはお前らが走ってた通りのクレープ屋でバイトしてるから」

「あ、はい」

「じゃ、オレはこれで」

【シュバッ！】

「……ホントに忍者なのね」

「で？お前は寮に帰らなくていいのかよ？」

「あぁ、その事？どうにも私が入るとこ、寮っていうか下宿みたいな感じらしいのよ」

全寮制といえども極稀に寮の部屋数が足りなくなることがあるらしくその場合は外部の寮や下宿が可能らしい。
で、私はその漏れた人間らしいのよね。その辺はお父さんの知り合いの寮だとか下宿だとか言ってたのよね。

「へぇ～、そうなのか。途中までなら送ってくぞ？」

「ふ～ん、女の子の住まいをしっかり確認しておきたいわけだ？」

「ちげぇよ！！！」

「ジョーダンよ、ジョーダン。お願いするわよ」

また、絡まれても面倒くさいしね

「はぁ～、不幸だ」

「不幸ってなによ？一応美少女のはずよ、私」

まぁ、自分で自分のことを女って言えるようになったのはかなり時間かかったけど……

「……はぁ～」

「溜息で返答すんなぁぁぁあ！！」

で、そんなこんなで送ってもらってたんだけど……

「なぁ、お前の下宿先、ここなのか？」

「そうよ？住所はここであってるし。立派なお屋敷ね」

麻帆良郊外にある目の前の大きなお屋敷が私の下宿先らしいの。しかし立派だわ

「あ～、非常に言いづらいんだけど…「おぉ、鳴海夏輝様ですね！」…また被った」

なんかカミジョーが言いかけてたけどお屋敷から出てきた初老の男性に遮られたわね

「到着するのが遅く心配しましたよ」

「あ、あはは、すみません。あの、あなたは？」

「ああっ！申し遅れました、私この屋敷の執事のゴンザと申します。現在主人は長期の仕事中でして私が留守を預かっております」

「ゴンザさん、ですか。これからよろしくお願いします」

ちゃんと挨拶はしなきゃね

「えぇ。それと、斗真様もおかえりなさいませ。まさか夏輝様とともにお帰りになられるとは、驚きましたよ」

「はい？」

今ナント？

「あ～、そのな？俺もここで下宿してんだよ」

……

「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

【回想終わり】

と、いうわけなのよ…

「アンタ、絶対私の部屋とかに来ないでよ?」

「いかねぇよ!!」

「嘘だっ！！」

「嘘じゃねぇし、その艶消しの目はやめろ！こえーよ！！」

嘘よ！絶対ラッキースケベ起こすに決まってるわよ！！

あぁああ！！もうなんでこうなるのよ！！

「不幸よぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

「それは俺のセリフだぁぁぁあっ！！！」

第2話　今日から私は異性（どうせい）と同居

転生者達その１（前書き）

やっと設定まで持ってけた……

転生者達その１

転生者達その１
鳴海（ナルミ）　夏輝（ナツキ）
原作開始時１４歳
性別：女性
身長：１５７ｃｍ
体重：アンタ殺されたいの？
好き：は虫類
苦手：足がいっぱいあるもの
天敵：台所のＧ　変態
魔力：――
気：Ｂ＋
保有スキル
発電能力（エレクトロマスター）
体内で電気を発生させる、要は静電気の極大版の様なもの
出力は某学園都市の第３位に負けずとも劣らない
メダルを弾いて撃ち出す超電磁砲（レールガン）や電磁力を用いての砂鉄操作、体内に電流を流すことでの反射速度の上昇など幅広い応用が可能

メダル精製器
空気中のチリや砂鉄を用いてメダルを造る腕輪型の物
このためお財布に優しい
備考
神様が気まぐれで選んだ死者の１人
前世では上杉元希（ウエスギ　ゲンキ）という成人したばかりの男性だったのだが神様に何かスキルを貰えるというから発電能力（エレクトロマスター）を選んだ結果何故かＴＳしてしまっていた。その為か容姿は某学園都市の第３位のロングヘアーバージョンだったりする。

また発電能力(エレクトロマスター)も発現当初はＬｅｖｅｌ．１程度の出力であったが日常的に能力を使用し、また演算能力を鍛えた為中学入学ギリギリには第３位クラスにはもっていけた。
ちなみに魔法先生ネギま！はよく知らず、基本的にアニメから原作に入っていたため、地雷臭がするから、という理由で見ていなかった。
また女性として生活を続けてきた為割と女性的な思考を出来るようになったが、未だに男性を恋愛対象とは見れない。

神条斗真(カミジョウ トウマ)
原作開始時１５歳
性別：男性
身長：１７１ｃｍ
体重：６２ｋｇ
好き：特売のセール品
苦手：不幸
天敵：不幸に気付けないこと
魔力：Ｅ
気：Ａ－
保有スキル
幻想殺し(イマジンブレイカー)
言わずと知れた異能無効化能力。もちろん効果範囲は右手首より先のみ。
全ての異能を消し去るため神からもたらされる幸運さえも消し去ってしまう。また、右手以外の箇所を治癒術で治そうとしても幻想殺

しが干渉を起こしてしまうため、治りはイマイチになってしまう。
同じように身体能力強化術も干渉してしまうために効果はほぼ現れない。
能力のオンオフは出来ない。

身体能力無上限
読んだまま。鍛えれば鍛えただけそれは肉体に還元される。ようは鍛えてさえいれば仮○ライ○ーみたいな身体能力を手に入れられる。

備考
気付けば文句を言いながらも人助けをしていた青年の転生後の姿。
彼だけはテンプレ的に誰かを死の淵から結構な頻度で助けていたために選ばれた。
オタク気味な友人に「お前に似てる主人公がいる。」と無理矢理に『とある魔術の禁書目録』のＤＶＤを渡され見たのだが、本人的には似ていないと思っている。
転生先が魔法があるとのことで魔法＝異能と考えた結果、幻想殺し（イマジンブレイカー）を選び、魔法は覚える気がなかったために身体能力無上限を貰ったのだが、幻想殺し（イマジンブレイカー）の副作用をすっかり忘れていた為に毎日大小関わらず不幸や事件に遭遇し、しょっちゅうフラグを建てている。ただ、本家上条さんと違い好意には気付くので丁重にお断りしている。
なお夏樹と初めてあった際に本気でビビってしまったのはいい思い出である。
彼はどんな場合であろうとも事件に巻き込まれることを神に定められている。
え？なぜかって？幻想殺し（イマジンブレイカー）を持ってるし、名前を見れば明白だろう？

長瀬佐右（ナガセ サスケ）
原作開始時１９歳
性別：男性
身長：１８９ｃｍ
体重：８０ｋｇ
好き：妹　友達　家族
苦手：悪友からの合コンの誘い
天敵：涙
魔力：Ｃ
気：Ａ＋
保有スキル
隠流忍術
言わずと知れた『忍者戦隊カクレンジャー』が使っていた忍術。神から頂いた際にちゃっかりドロンチェンジャーとカクレマルは貰っている。
得意とするのは名前から解るように『分身（ワケミ）の術』である。

甲賀流忍術
これは転生後に得た技能。転生後の生家が甲賀忍群の１つであったために流れで修行を行い、身につけた。
しかし才能自体は妹に劣るため、現在の位は妹と同じ中忍である。

備考
もとは鳶（とび）職の若手だった２０代前半の男性だった。マンガは気が向いたら週刊誌をコンビニで立ち読んでいた程度なので、ネギま！は中途半端どころかほとんど知らない状態で転生した。というより転

生自体よくわかってはいない。幼少の頃に見て憧れた『カクレンジャー』の力を貰う。（ちなみに作者が好きな戦隊はダイレンジャーとカクレンジャーです。）
転生後は忍の家系に生まれ憧れていたマジモンの忍者になるべく日々修行中。
中学卒業までは山里にあった小さな学校に通っていたが、親に高校と大学位は出ておけと言われた為にエスカレーター式な麻帆良にやって来た。
現在は大学では民族学や考古学を先行している為、某女子寮の管理人とは知り合いだったりする。
あだ名は名前を音読みして「サユー」である。
若干シスコンの気がある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7575y/

魔法先生ネギま！転生者なイレギュラー

2011年12月11日11時46分発行